



豊穡な大地を取り戻し 子どもたちの笑顔があふれる村へ

震災からの迅速な復旧と、未来を見据えた営農を目指し
 村の被災農家が協力して誕生した宮城リスタ大川。
 「かつての活気を取り戻したい」との思いを胸にスタートしました。

文／中山斉（フリーター） 写真提供／水土里ネットみやぎ、宮城県東部地方振興事務所

平成10年度からほ場整備事業をスタートし、稲作農業の生産性向上を目指してきた宮城県石巻市の大川地区。整備事業がほぼ完了していたところに震災が発生し、津波によって農地の大半が壊滅的な状況に。人的にも大きな被害が出ましたが、早期の営農再開を目指して株式会社宮城リスタ大川を設立、大槻幹夫さんが代表に就任しました。

復興のために法人化を決断 稲作とともに菊栽培を導入

石巻市の北東部に位置し、北上川の下流右岸に広がる水田地帯。一部の農家では畜産の複合経営も行われていたが、ほとんどが小規模な稲作農

たのですが、それぞれの任意組合から理解を得られず、実現できずにいました。しかし、この未曾有の大災害からの復旧・復興を進めるには、さまざまな支援が受けられる法人化が絶対に必要。われわれにはそれしか道が残されていなかったんです」と語る大槻さん。任意組合の理解を得て、ついに法人化に踏み切りました。24年から農地の復



旧工事をスタートし、25年5月23日に農業生産法人・株式会社宮城リスタ大川が誕生。農地が海水に沈んでから3年、農地の集積がゼロというところから、26年には164haで営農が再開できるようになり、水稻は55・4ha作付けしました。

稲作だけの経営に限界を感じていた大槻さんは、この地区で35年以上にわたって菊栽培に携わってきた大槻樹夫さんと協議を重ね、土地利用型の稲作と労働集約型の菊栽培を経営の柱にすることを決意。84aの施設園芸ハウスを建設して菊栽培をスタートさせ、育った生花は石巻市や仙台市の市場で販売しています。

「菊は天候に左右されず、値崩れすることはありません。ただし、スタートしてまだ1年なので慣れない点も多い

地域営農と 農村の復興を



1. 社長の大槻幹夫さん。震災を機に以前からの懸案だった法人化を実現し、早期の営農再開に結びつけた。2. 20代の若手社員も入社し、菊栽培などの作業に精力的に取り組んでいる。3. 被災地域農業復興総合支援事業を活用し導入したコンバイン。他にトラクター、田植機（乗用型）などの機械類、菊栽培のハウス建設も同事業を活用した。4. 多面的支払交付金で取り組む法面（のりめん）の草刈り作業。5. 復旧した農地で、収穫を待つ実った稲を見つめる大槻さん。完全復旧まではまだ時間を要するが、確かな手ごたえを感じている。

先祖が残した大地を守り 子どもの歓声を取り戻す

「震災前にも法人化への指導があっ

「かつて、このあたりは冷害による飢

「かつて、このあたりは冷害による飢

「かつて、このあたりは冷害による飢

6. 秋彼岸の出荷に向けハウス内で育つ菊。生産50万本、1年あたり2.5回の収穫が目標。7. 新たに導入した菊の選別機。仙台市や石巻市の市場での販売を足掛かりに地域の特産化を目指している。8. 復旧した農地で4年ぶりに行われる稲の刈り取り作業。9. 法人として周年雇用を目指しつつ、一丸となって復興に取り組む。10. 秋刈り取られた稲が運ばれる北上地区共同乾燥調整貯蔵施設（北上カントリーエレベーター）。平成25年9月に運用開始、3,000tの貯蔵能力を備え、水田500ha分のコメの乾燥、貯蔵ができる。

